

## 「表し」と「漏れ」 —非流ちような発話をめぐって—

定延 利之

コミュニケーションや言語を「意図的なもの」としてとらえようとする伝統は、古くから幅広い分野に及んでいる(例[1]-[4])。だが、そうした見方の限界もまた、以前から指摘されている(例[5])。本講演ではこうした研究動向を踏まえた上で以下2点を説いた。

第1点。現代日本語やそのコミュニケーションは、話し手や行い手の意図を前提とするととらえられない領域が確かにある。その領域は我々の想像を超えた広がりを持っており、「反射的な叫び」「もらい泣き」「聞こえよがし」のような、それなりに特異そうに見える現象だけでなく、「挨拶」(これは対人関係調整機能から説明しきれない)のようなごく日常的な現象までがこれに含まれる。若者語から一般語へと広まり、定着しつつある「キャラ」という日本発祥の語も、「人間は状況によって変わらない。変わっているように見えるのは人間が目的をうまく果たすために状況に応じて使いこなすスタイルである」という伝統的な人間観のアンチテーゼを具現したものと言える。「バイトと普段のキャラ違う奴来い」「なぜか「姉御キャラ」になっていく私」といったネットへの書き込みは、状況によってスタイルだけでなく人間自身も(意図に反して)変わり得ることを示している([6][7])。以上の考えが正しけ

れば、これまで意図的な「表し」と考えられてきたものが、実は非意図的な「漏れ」であったという可能性がないかどうか、そして「表し」のような「漏れ」のような、虚実皮膜的な「漏らし」の世界を探索する必要はないかどうか、チェックして見る必要はないか。

第2点。非流ちような発話は多くの場合、意図されない漏れである。だが、その中には、コミュニケーション行動のパターンとして確立しているものがある。これら「雄弁」な非流ちよう性を生んでいるのは、我々のコミュニケーションの特質ではないか。チェスやテニス(結果(駒やボールの位置)が全てで、初心者でも運に恵まれれば得点は理論的に可能だが、我々のコミュニケーションは結果だけでなく経過も重視し、つまり「人を見る」。初級学習者が母語話者と同じように「マ、マケドニア」などつつかえても、単なる発音のトラブルと片付けられがちで、驚きやためらいの漏らしとは理解されない。驚きやためらいのつかえは、基礎的スキル(語音やアクセントの発音)を習得した「黒帯」専用の漏らしである。

\*本講演は科学研究費補助金による基盤研究(A)15H02605(代表者:定延利之)の成果を含んでいる。[1] Grice, P. 1957 "Meaning." [2] Ekman, P. &

W.V. Friesen 1969 "The repertoire of nonverbal behavior." [3] MacKay, D.M. 1972 "Formal analysis of communicative processes." [4] Sperber, D. & D. Wilson. 1986 Relevance. [5] 北村光二 1988「コミュニケーションとは何か?」『季刊 人類学』19-1, 40-49. [6] 定延利之 2011『日本語社会のぞきキャラくり』三省堂. [7] 定延利之 2012-「日本語社会のぞきキャラくり補遺」Sanseido Word-Wise Web (<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/sadanobu/>)

#### ◇表現研究関連文献紹介

はんざわかんいち著 『表現の喩楽』(明治書院、平成27年7月刊、3500円+)

本書をあえて一言にまとめれば、9人の作家と2つの言語現象を、比喩という切り口から解剖した本、となるだろうか。

取り上げられている作家は村上春樹・藤沢周平・小林秀雄・シェイクスピア・富士谷御杖など多彩であり(言語現象は中曽根元首相の「不沈空母」発言と言語習得)、章ごとに疑喩・闇喩・鰻喩・魔喩・倒喩といった不思議な名称が冠されている。一見言葉遊びのような名前だが、実はそれぞれが章の要約になっている。各章のテーマは、作家の方法、比喩の翻訳可能性、作家の言語観、主意と媒体(喩辞)の関係など様々で、論理展開には一つとして似たものがない。そして、全ての章はその作家らしい魅力的な比喩の用例に満たされて、比喩のアンソロジーのようである。さながら比喩の万華鏡であり、「喩楽」という凝ったタイトルに納得させられる。

中でも個人的に興味深かったのは、小林秀雄にとっての比喩の意味を追求した「鰻喩」、シェイクスピアの言語観を追求した「魔喩」であった。どちらも読者を納得させる論理性を備えているが、はんざわ氏は抽象概念の組み合わせから結論を引き出すような野暮はせず、用例を重ねて作者に語らせていく。そして、引用される用例が魅力的なのである。「凡そ究極的な問題は、直観によつて掴む他はないもので、直観の率直な表現が、屢々逆説に見えるといふ事は、ニイチエ

(6頁へ続く)